

活動

地球研は大学共同利用機関としてさまざまな活動を行なっています。

共同研究

各大学、各省庁、地方公共団体(公的機関)、民間の研究機関、海外の研究機関と連携を図っています。海外の研究者との連携を密にするため、各国から著名な研究者を多数招いています。

研究成果の発信

国内外の研究者コミュニティを対象とした「地球研国際シンポジウム」、地球環境問題について幅広い提起を行なう「地球研フォーラム」、研究成果をわかりやすく一般市民に紹介する「地球研市民セミナー」、地域の人々と活発な議論を行なう「地球研地域連携セミナー」、そして地球研の施設や研究内容を紹介する「地球研オープンハウス」などを実施しています。



地球研オープンハウスの様子

刊行物

地球研の成果を一般にわかりやすく紹介する「地球研叢書」、国際社会に向け広く発信する「地球研英文叢書」のほか、研究者の活動内容などを発信する「地球研ニュース」などを刊行しています。

施設

研究者同士の交流を図る開放的な研究室

地球研は、なだらかに弧を描いた全長150mの建物に、すべての研究プロジェクトが有機的な連携をもてるよう開放的に設計されています。建物のほぼ中央には、研究者が利用する図書室や情報処理室を配置するとともに、日常的な議論を行なうためのスペースもあります。



研究室から望める中庭

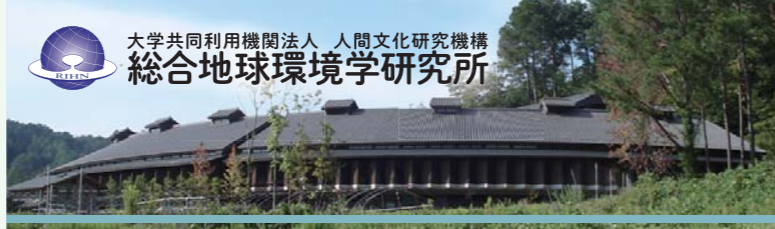
多様な研究に応える18の実験室



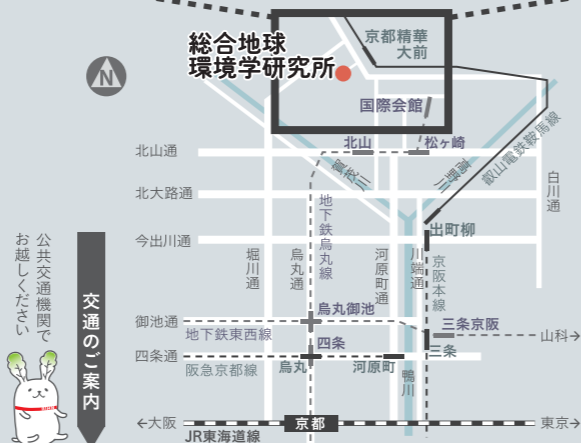
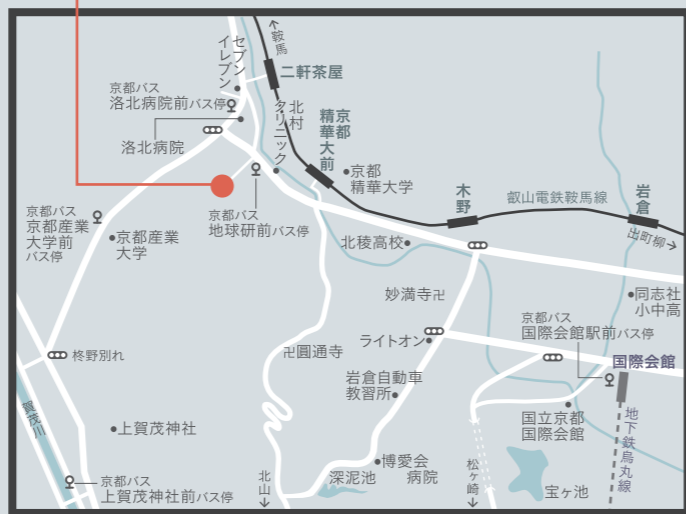
質量分析室での作業風景

地球研では、世界各地で採取された研究試料を取り扱っています。これらの試料から多種多様な環境情報を獲得できるよう、低温室、培養室、クリーンルームなどを含めてさまざまな機能をもつ18の実験室を整備しています。さらに安定同位体など、人間と自然系の相互作用環境研究に新しい情報をもたらす最先端の分析・計測機器を設置しています。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所



〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4
TEL. 075-707-2100(代) FAX. 075-707-2106
http://www.chikyu.ac.jp 地球研 検索



公共交通機関でお越しください

- 地下鉄丸の内線/京都駅→(20分)→国際会館駅→京都バス40系統「京都産業大学ゆき」または50系統「市原ゆき」または52系統「市原経由貴船口・鞍馬・鞍馬温泉ゆき」(6分)→「地球研前」バス停下車すぐ
- 京阪沿線/出町柳駅→叡山電鉄鞍馬線(18分)→京都精華大前駅→(徒歩10分)→地球研
- 上賀茂方面より
 - 京都バス32系統、34系統、35系統に乗り、「洛北病院前」バス停下車徒歩10分
 - もしくは、上記に乗り「京都産業大学前」バス停下車、京都バス40系統「国際会館駅ゆき」に乗り換え、「地球研前」バス停下車すぐ



地球に人がいる
文化がある
環境と文化はつながっている



Photo: ISHIYAMA Shun

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所

2013

RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANITY AND NATURE

総合地球環境学研究所長

安成 哲三
YASUNARI Tetsuzo

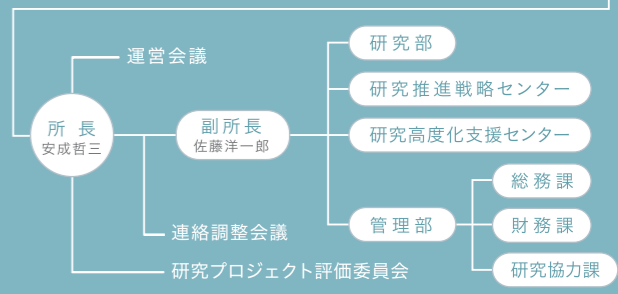
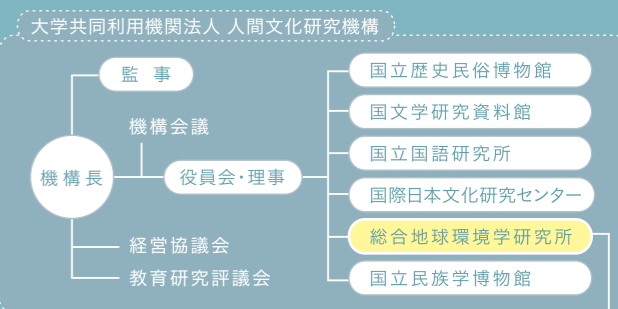


地球環境問題の根源は、人間と自然系の相互作用のあり方にあります。環境の破壊(悪化)は、この人間と自然系の相互作用環の不具合として現れますが、どのような相互作用環であるべきか、人間と自然系の関係を根本からとらえなおそうとしているのが総合地球環境学研究所(地球研)です。

さまざまな形で現れている地球環境問題を、地球的視野で総合的に研究し、未来可能性のある社会の構築に寄与することを目的としています。この目的の達成に向けて、基幹研究プロジェクトや連携研究プロジェクトなど多くの研究を進めています。地球環境学リポジトリ事業や国際連携なども新たに進めており、世界でもユニークな研究機関、国際研究拠点として、大きな飛躍を遂げるべく覚悟を新たにしております。

組織図

(2013年4月1日現在)



研究プロジェクト

地球研では、人間と自然系との相互作用環を明らかにする研究をさまざまな領域について進めています。研究領域として、循環(主幹: 谷口真人)、多様性(主幹: 佐藤 哲)、資源(主幹: 窪田順平)、文明環境史および地球地域学(主幹: 佐藤洋一郎)の5つの領域プログラムを設定し、それぞれのプログラムのもとに多様なテーマを掲げた研究プロジェクトを推進しています。(2013年4月1日現在)

温暖化するシベリアの自然と人 —水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応



C-07 循環
本研究5年目 プロジェクトリーダー 檜山哲哉 (ひやま・てつや)
シベリアは温暖化がもっとも顕著に現れると予測される北半球高緯度にあり、降水量、融雪時期、河川・湖沼の凍結融解時期が変化し、永久凍土が劣化しています。その結果、河川の解氷洪水の規模が変化し、湿潤・乾燥の変動幅が大きくなってトナカイ牛馬飼育や野生動物の狩猟・漁撈など、地域の人々の生業に大きな影響を与えています。人々がそれらにどのように適応しているのかを調査しています。

主なフィールド: ロシア サハ共和国、レナ川流域

アラブ社会におけるなりわい生態系の研究 —ポスト石油時代に向けて



R-05 資源
本研究5年目 プロジェクトリーダー 縄田浩志 (なわた・ひろし)
中東の乾燥地域において、1000年以上にわたり生き残り続けることができたアラブ社会の生命維持機構と自給自足的な生産活動の特質を明らかにし、ポスト石油時代に向けた、地域住民の生活基盤再構築のための学術的枠組みを提示することをめざします。

主なフィールド: スーダン半乾燥地域、エジプト・シナイ半島、アルジェリア・サハラ沙漠、サウディ・アラビア紅海沿岸

メガシティが地球環境に及ぼすインパクト —そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案



C-08 循環
本研究4年目 プロジェクトリーダー 村松 伸 (むらまつ・しん)
地球上の人口の半分を支える都市は、今後、人類が生きるべきもっとも重要な空間です。この都市と地球環境とが調和する方法を導き出すため、人口1000万人以上のメガ都市に関して、(1)異なる学問領域、歴史、文化などからメガ都市を統合的に認識する手法の確立、(2)問題低減に向かう統合的解決策の提示、(3)環境、経済、社会の豊かさを統合した都市のあるべき姿の提示、を目標としています。

主なフィールド: 開発途上国のメガシティ、特にインドネシアのジャカルタ

東南アジアにおける持続可能な 食料供給と健康リスク管理の流域設計



R-06 資源
本研究3年目 プロジェクトリーダー 嘉田良平 (かた・りょうへい)
人口増加や土地改変などによる環境・生態的異変が人々の食と健康に及ぼす影響を及ぼしているのかを明らかにして、集水域を単位とするリスク管理の構築をめざします。特に都市化の影響が著しいフィリピン・ラグナ湖周辺地域を重点調査対象として、水質や食品の汚染による食生活・健康面への影響とメカニズムを解明し、問題解決への政策提言にも取り組んでいます。

主なフィールド: フィリピン・ラグナ湖周辺地域

統合的水資源管理のための「水土の知」を設える



C-09-Init 循環
本研究3年目 プロジェクトリーダー代行者 窪田順平 (くぼた・じゅんぺい)
約20年前に提唱された統合的水資源管理は、現実の水問題解決に十分寄与しておらず、人間活動が及ぼす影響の地球規模での評価と社会への適用という点で課題を抱えています。この課題を克服すべく、研究対象地域にてステークホルダーと協働して水管理の調査・研究を進めています。最終的には、その知見を統合して地球規模での水資源アセスメントを実施するとともに、それに基づいた管理の指針を地域に提示することをめざしています。

主なフィールド: トルコ、インドネシア、琵琶湖湖東地域(日本)、エジプトなど

東南アジア沿岸域における エリアケイパビリティの向上



D-05 多様性
本研究2年目 プロジェクトリーダー 石川智士 (いしかわ・さとし)
住民と自然の関係性向上が、持続的な生態系サービス利用と地域開発を両立させる鍵であるという仮説に基づき、東南アジアの沿岸域を対象として自然資源の利用と地域開発の可能性について研究しています。さまざまな地域で、住民、行政、研究者の協働によるケーススタディーを実施し、未来可能性を探るためのエリアケイパビリティの調査手法と社会実装に向けたガイドラインの作成をめざします。

主なフィールド: 東南アジア沿岸域(タイ・フィリピン)と石垣島(日本)

砂漠化をめぐる風と人と土



R-07 資源
本研究2年目 プロジェクトリーダー 田中 樹 (たなか・うえる)
アフリカやアジアの半乾燥地は、資源・生態環境の荒廃と貧困問題が複雑に絡みあう砂漠化地域です。わが国を含む砂漠化対処条約(1994)の批准国には、問題解決のための学術研究と社会実践の両面での実効ある貢献が長らく求められてきました。対象地域の風土への理解を深めながら、日常のなかの生業活動を通じて、暮らしの安定や生計の向上につながり、結果として環境保全や砂漠化抑制ができる技術や道筋を探ります。

主なフィールド: ニジェール、ナミビア、インド

地域環境知形成による 新たなコモンスの創生と持続可能な管理



E-05-Init 地球地域学
本研究2年目 プロジェクトリーダー 佐藤 哲 (さとう・てつ) 共同リーダー 菊地直樹 (きくち・なおき)
生態系サービスの劣化など地球環境問題の解決には、地域の実情に即したボトムアップの取り組みが重要です。地域の人々による取り組みの基礎となる新しい知識の構造として、科学知と人々の生活のなかで培われてきた多様な知識体系が融合した「地域環境知」に着目します。世界各地の事例を収集分析し、地域環境知の形成、流通のメカニズムと、それを生かした順応的ガバナンスのあり方を探求します。

主なフィールド: 屋久島、知床、石垣島白保、綾町、フィジー、アメリカ領バージン諸島、フロリダ州サラソタ湾、マラウイ湖

アジア環太平洋地域の人間環境安全保障 —水・エネルギー・食料連環



R-08-Init 資源
本研究1年目 プロジェクトリーダー 谷口真人 (たにぐち・まこと)
アジア・環太平洋縁辺域では、アジアモンスーン気象・水文条件と、火山地熱地域の地質・地形要因および歴史社会的要因などにより、そこに暮らす人々や社会への利益・サービスとリスクが共存し、水・エネルギー・食料連環によるさまざまな地球環境問題が存在します。複合的な人間環境安全保障を最大化するために、環境ガバナンスの構造と政策の最適化の方法を提示します。

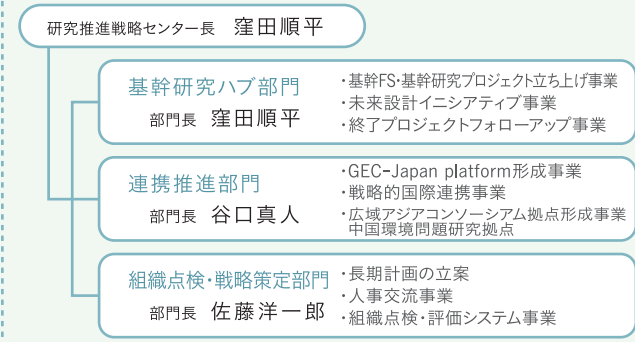
主なフィールド: 日本、インドネシア、フィリピン、カナダ、アメリカ

研究推進戦略センター(CRD)と 研究高度化支援センター(CRP)

研究推進戦略センターは、地球研で実施される多様な調査・研究の支援と成果発信を行なってきました。2013年度からは、さらなる研究の発展をうながし、その基盤となる実験と分析、情報、戦略的広報の体制を充実させるため、研究推進戦略センター(CRD: Center for Research Development)と研究高度化支援センター(CRP: Center for Research Promotion)の2センターに移行しました。

研究推進戦略センター(CRD) Center for Research Development

CRDでは、地球環境問題の解決のための知の統合をめざし、(1)研究プロジェクトの成果や課題を統合し、新たな研究プロジェクトの立案を行なう基幹研究ハブ部門、(2)学術の動向や社会の要請を調査し、国内外との連携を図る連携推進部門、(3)中長期的な視点で、地球研の方向性を探る組織点検・戦略策定部門の3部門により、研究開発と、評価を含めた研究実施体制の確立をめざします。



研究高度化支援センター(CRP) Center for Research Promotion

地球研には、専門分野が異なる多様な研究から生まれる知と、研究から得た情報の整理や発信などから生まれる知があります。CRPは、この横断する知の高度化と、実験機器や情報機器の維持管理、成果発信に関するさまざまな支援を行ないます。

